

国立国会図書館



館長対談 第10回
慶應義塾学事顧問、慶應義塾大学教授 安西祐一郎氏

知識は力である

出発進行！「のりもの」本めぐりへ

2009.9
No. 582

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。</small>	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00	オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。</small>		

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声・FAXサービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	<small>※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。</small>	
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

- 02 『ヤポン・モフビリー』
世界ノ回教諸国ニ日本ヲ紹介スル唯一ノ雑誌
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 国立国会図書館 館長対談 第10回
慶應義塾学事顧問、慶應義塾大学教授 安西 祐一郎氏
知識は力である
- 12 出発進行！「のりもの」本めぐりへ
- 18 公共図書館が国立国会図書館に期待すること
- 22 国立国会図書館の書庫 第4回 書庫の環境を整える (2)
- 27 ビジュアル国立国会図書館博物館 (14) 漢字テレタイプ型入力機
- 28 ドイツ政府機関図書館の連携協力

11 館内スコープ

国立国会図書館年報 1年がつまった1冊

24 本屋にない本

- 『多摩動物公園 50年史／資料編』
- 『江戸の花屋敷 百花園学入門 向島百花園創設 200周年記念』
- 『蜀山人大田南畝 大江戸マルチ文化人交遊録』

30 お知らせ

- PORTAのサービス拡大
ーCiNii、JAIROが検索できるようになりました
ー携帯端末用サイトを試験公開しました
- 近代デジタルライブラリーで15万冊以上の図書が閲覧可能になりました
- NDL-OPACの検索結果から他のデータベースへリンクするサービスを開始しました
- 資料収集の方針をホームページに掲載しました
- 国際子ども図書館講演会「本と子どもと大人をつなぐ場所ー“本の城”(IJB)での20年」
- 関西館小展示第3回「眺めてみよう、色々な国・時代の百科事典」
- 「本の万華鏡」第2回「洋靴」
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

『ヤポン・モフビリー』 世界ノ回教諸国

林 瞬介



写真1

表紙。使用されている活字は、満鉄と森村財閥から資金援助を受けて、当時アラビア文字の使用が禁止されたトルコから輸入したもの。中央の図は「ミカドの宮殿」。

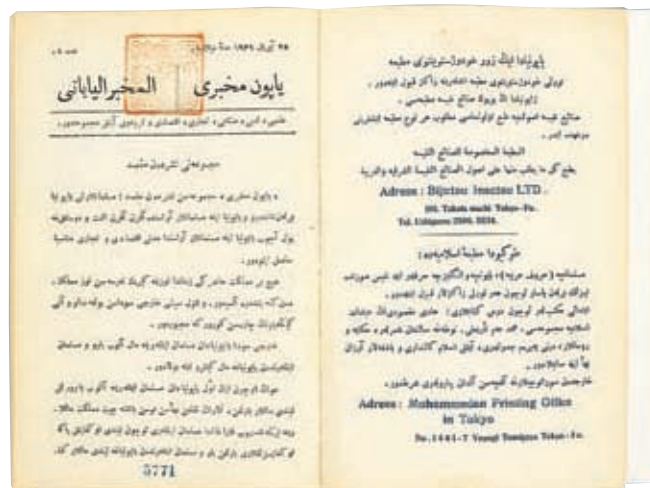


写真2

巻頭。標題だけはタタール語 (Yapon möxbire) とアラビア語 (al-Mukhbir al-Yabāni) が併記されているが、記事本文はすべてタタール語で書かれている。

大正末期から昭和戦前期にかけての日本には、ロシア革命(1917年)の混乱を避けて亡命したロシアの沿ヴォルガ・ウラル地方出身のトルコ系イスラム教徒、タタール人たちが数多く暮らしていた。当時の日本では、彼ら在日亡命タタール人を通じて世界のイスラム(回教)諸国と連携しようとする動きがあった。

写真1~4は、東京で在日タタール人が出版した日本初のアラビア文字の雑誌『ヤポン・モフビリー(日本通報)』の創刊号(1931年4月)である。この雑誌はタタール人の母語であるタタール語が用いられ、「日本在住のイスラム教徒について広報し、日本とイスラム教徒の友好の道を開く」ことを出版の目的として巻頭に掲げている(写真2)。

この雑誌を印刷した東京回教印刷所は、ロシア革命後の内戦で白軍(反革命軍)側として戦った経歴を持つクルバンガリーを代表とする、東京回教団という在日タタール人組

織を母体とする。1924年に来日したクルバンガリーは、東京在住のタタール人を組織化し、東京回教寺院(現在の東京ジャーミー・トルコ文化センター。東京都渋谷区)の建設に奔走した。東京回教印刷所を設立し、アラビア文字活字印刷を行ったのも、その活動の一環である。

日本におけるクルバンガリーの精力的な活動の背景には、日本の政・官・軍・言論界の支援があった。クルバンガリーの相談役であった嶋野三郎(南満洲鉄道(満鉄)東亜経済調査局のロシア情報担当調査員)の回想によると、国粋主義者として知られるジャーナリストの五百木良三、アジア主義の巨頭である頭山満、政治家の犬養毅、床次竹二郎、松岡洋右らがクルバンガリーを支援していた。回教寺院の建設やアラビア文字の印刷を援助すれば、日本はイスラムに理解があると世界に宣伝でき、イスラム諸国との連携が実現するとクルバンガリーは主張していたようだ。

二日本ヲ紹介スル唯一ノ雑誌



写真3
寄稿者の紹介写真（一部）。中央は頭山満、右上は五百木良三。



写真4
記事の一例。東京でアラビア語を学んだ日本人「マサコ」氏がエジプトに留学したことを紹介している。



写真5
1934年に東京回教印刷所が印刷・発行した日本初のコーラン。〈請求記号 196-139〉
これらのアラビア文字印刷物は世界33か国に配布され、日本におけるイスラム教徒の活動をイスラム諸国に宣伝した。

雑誌『日本通報』も、こうしたクルバンガリーへの支援と彼の宣伝活動の中から出版が企画されたものであろう。

創刊号に祝辞を寄せた人々の中には、阪谷芳郎（元大蔵大臣）、鳥居龍蔵（人類学者）、長岡外史（元参謀本部次長）といった貴顕・碩学、さらには頭山満の名前が見え（写真3）、五百木良三は、日本とイスラム教徒の友好に関する論文を寄せている。官界からは、商工省貿易局長やジャパントーリスト・ビューロー（JTB社の前身）理事といった人々による文章が掲載された。彼らは、この雑誌を通じて日本とイスラム諸国の連携を実現しようと、どうやら本気で考えていたようである。

印刷された『日本通報』は、世界のイスラム教徒に配布された。しかし、実際に期待するとおりの宣伝効果があったかという点には、大いに疑問が残る。世界のイスラム教徒の言語はアラビア語・ペルシア語・ウルドゥー語など、

文字は同じであっても相互の意思疎通が不可能なほど多様である。この雑誌で用いられたタタール語はトルコ系の言語であり、読者はトルコとロシア周辺に居住するトルコ系のイスラム教徒に限られたと思われる。

『日本通報』の刊行後、第二次世界大戦を経て在日タタール人の多くは日本を離れ、彼らの印刷したアラビア文字の印刷物も日本にほとんど残されなかった。『日本通報』の当館における所蔵も、今回紹介した創刊号1部だけである。

Yapon mohbiri (1) 1931年4月 <請求記号 Z51-A481 >

※ この資料は、関西館で所蔵しています。

参考資料

- 『イブラヒム、日本への旅』小松久男著 刀水書房 2008年
- 『在日タタール人』松長昭著 東洋書店 2009年
- 『嶋野三郎』満鉄会ほか編 原書房 1984年

第10回 知識は力である

自分の目標を強くもっているほど、
その目標を達成するための知識を
多く記憶できるということは、
人間の大きな能力だと思います。

今月号のお客様 慶應義塾学事顧問、慶應義塾大学教授 安西 祐一郎 氏



認知科学、情報科学の研究者であり、また、高等教育に深く携わってこられた安西祐一郎氏に、知識のあり方と、人間は情報技術をどのように使いこなしていくかということについてお話を伺いました。

長尾 今日はお忙しい中おいでいただきありがとうございます。私どもの図書館は「知識は我らを豊かにする」というキャッチフレーズを掲げておりまして、今日は、「知識」を中心にお話できたらと考えました。安西先生は認知科学などを通して知識のあり方をずっと研究しておられますが、21世紀に入り、情報化が進んで社会が複雑になっていく中で、知識についてどのようにとらえていらっしゃいますか。

安西 私は特に「人間が知識をどのように学んでいくのか」ということに長年興味をもっております。いろいろ調べていくと、人間の情報処理や思考の過程、知識を学ぶ力は大変なもので、すばらしく精妙に、豊かにできていることが実感されます。例えば、人がいったいどのくらいの量を記憶できるのかということとはわかっておりません。ある意味でいくらでも記憶できるし、記憶の仕方自体が、その目的によって変化する。例えば、「こういうことを知りたい」「将来こういう人間になりたい」という気持ちが強いと、情報を収集し分析し、自分なりに思考する方法を、非常にシャープに作り出せるのです。自分の目標を強くもっているほど、その目標を達成するための知識を多く記憶できるということは、人間の大きな能力だと思います。夢とか目標があれば、関係がないようにみえる情報もつながる。これは今のところ人間でなければできません。

そういうことから考えると、知識というもの、ただ受け身で暗記するように身につくものではなくて、自発的に「知りたい」という気持ちをもっていることが大事です。

今の世の中は、個人が得られる情報が膨

大にあります。その中からどういう情報を選別するかということを選んでいかなければならない時代だと思っています。

長尾 選別するには、自分なりの価値観、ものの見方を確立するための訓練をしなければなりませんね。

安西 知識あるいは学問を大量にもつだけではなくて、どのようにものを考えるか、それらの知識をどうとらえるかというトレーニングを積むことが大事だと思います。これからの大学、特に日本の大学は、そういう方向を目指すのではないのでしょうか。

長尾 大学においては、そのような訓練の場として図書館が中心的存在であるはずですが、欧米に比べて日本では学生の図書館利用がもう一つ活発でないような気がします。学生だけでなく我々もそうですが、図書館じゃなくてインターネットを活用してるでしょう。教育において、また知識の獲得において、インターネットはどうなっていくのでしょうか。

安西 私は、インターネットは基本的に道具として活用していくべきだと思っています。インターネットを使うことによって必要な情報を迅速に得られる、このポジティブな面は評価すべきですね。ただ当然のことですが、インターネット上の情報が正確なものだとは限らない。このことは十分注意が必要だし、教育の場でも教えていくべきだろうと思います。書物、特に古典の場合は、何年もの間に多くの人の、それこそ一字一句までもの評価を経て残ってきたものです。インターネットの場合は、二番煎じあるいはその情報が載っていることがあるわけで、それを見分ける力を養わなければいけないのではないのでしょうか。

長尾 国立国会図書館では紙の出版物を納

長尾

慶應義塾は伝統をもっているから、そこが魅力ですね



Makoto Nagao

1936年三重県生まれ 工学博士
専門は、自然言語処理、画像処理、パターン認識、電子図書館。
京都大学工学部電子工学卒業、京都大学総長(第23代)、独立行政法人情報通信研究機構理事長を経て、2007年4月から国立国会図書館長。

私の問題意識

知識を収集・蓄積し、利用に供するのは図書館の仕事であるが、それをういて知識を創造するのは大学の役目である。長年大学教育に携わり、人間の頭脳活動に関する認知科学の分野で独創的な研究を展開してこられた安西先生に図書館と教育・研究とのかわりについてご意見を聞きたかった。また情報科学の専門家の立場から、知識の集積と組織化、その活用の仕方、さらにはこれからのネットワーク時代の図書館、教育などのあり方についても議論したかった。

本制度によって集めていますが、インターネット上に、紙になっていない良い情報もあるわけですね。紙と同じように、情報を集めて、保存して、利用に供するというをやらなくてはいけないと思うんですが、何を集めたらよいかということは難しい問題です。

安西 慶應では昨年、Googleとタイアップして書物のデジタル化を始めております。福澤諭吉の著作のほか、著作権の存続していないものをGoogleの技術でデジタル化して、世界に発信していくことは、慶應義塾にとっても日本にとっても有意義なことだと考えております。

長尾 それは英語の訳文や解説があるのですか。

安西 いいえ、原本をデジタル化したもののみです。

長尾 デジタル化を進める中で、書物は個別に書棚に並んでいますが、関連する書物をリンクさせて、知識のネットワークを作れば、人間の頭の中の構造に似てくるのではないかなと思うんですが。

福澤諭吉といえば、先般東京国立博物館で展示会*をしておりましたが、すばらしかったですね。

安西 おかげさまで皆様に喜んでいただきました。あまり知られていなかった福澤諭吉の男女同権論など、いろいろ紹介いたしました。

長尾 ああいう展示ができるなんて、うらやましいですね。慶應義塾は伝統をもっているから、そこが魅力ですね。

安西 慶應は去年開塾150年を迎えました。

*未来をひらく福澤諭吉展。東京国立博物館では平成21年1月9日から3月8日まで開催。このほか福岡市美術館、大阪市立美術館でも開催された。

150年前というと明治維新の10年前、安政5(1858)年で、安政の大獄の年なのです。吉田松陰などが処刑された頃に開国派の洋学塾として開塾している。その国自体が苦勞している時代、封建時代から近代化していく時期に開かれた学校ということで、歴史的にみると重みがあります。

長尾 慶應義塾は、大学としての理念がずっと一貫していますね。

安西 「独立自尊」の精神は現代に通じますね。明治12年、西南戦争の直後でインフレになり学生・受験生が激減して、福澤は塾をたたもうと言ったのです。それを周りが押しとどめて乗り越えたということがあります。もう一つの危機は、福澤諭吉が亡くなった明治34(1901)年で、創立者がいなくなっても、福澤の意思を継いだ塾生・卒業生が塾を盛り立てていった。戦争のときもたいへんな苦勞がありましたが、そういったことの積み重ねで来ております。慶應の三田キャンパスの図書館(旧館)は、創立50年のときに、これからさらに学問の府として進んでいかなければならないということで建設したものです。重要文化財に指定されております。

長尾 明治のあの頃は、ビジョンをしっかりと持った人たちが活躍して日本を支えてきたわけですね。今の日本でもそういう雰囲気になって、ビジョンをもってがんばろうという人がもっと出てきてもらわないといけませんね。

安西 長尾先生、そんなこと仰ってないで(笑)、一緒にがんばりましょう。ビジョン、理念といったものは日本では受け入れられにくいですけど、それでもやはり、長く続く理念は大事だと思います。

長尾 先生は、日本の公共図書館や国立国



Yuichiro Anzai

1946年東京生まれ 慶應義塾大学理工学部情報工学科・同大学院理工学研究科開放環境科学専攻教授、慶應義塾学事顧問。専門は、認知科学、情報科学。

1974年慶應義塾大学大学院理工学研究科管理工学専攻博士課程修了、工学博士。北海道大学文学部行動科学科助教授、慶應義塾大学理工学部電気工学科教授、同情報工学科教授、慶應義塾大学理工学部部長・大学院理工学研究科委員長、慶應義塾長を経て現職。現在内閣府教育再生懇談会座長、文部科学省中央教育審議会大学分科会長、同科学技術・学術審議会基本計画特別委員会委員等。

おもな著書に『問題解決の心理学—人間の時代への発想』(中央公論社 1985年)、『認識と学習』(岩波書店 1989年)、『認知科学の新展開』全4巻(共編)(岩波書店 2001年)、『未来を先導する大学—慶應義塾長、世界の学長と語る』(慶應義塾大学出版会 2004年)、『教育が日本をひらく—グローバル世紀への提言』(慶應義塾大学出版会 2008年)など。

安西 「独立自尊」の精神は現代に通じますね

会図書館の活動について、どのように見ておられますか。ご期待などありましたら。

安西 一国民として、国立国会図書館の利用の仕方をもう少し多くの人が理解しやすいように示していただければと思います。私自身は東京に住んでおりますけれども、日本全国の方から見て親近感があるかどうか。

長尾 世界が電子図書館の方向に転換する中で、我々も努力はしているんですが、まだまだ遠くの方に十分なサービスを提供することは難しいですね。まず本をデジタル化して、次に送信するとなると著作権の問題があるし、出版社や著者との関係もありますし。

安西 もう一つ期待しておりますのはアーカイブ(保存庫)の機能です。すでに十分な蓄積がおありとは思いますが。国立国会図書館に国としての知識がきちんと保存されることは、一国の大事な機能だと思います。これがなかなか一般には理解されにくいように思いますけれども。

塾長をやっておりましたとき、外国の大学との関係を構築する中で、“global knowledge sharing”、インターネットなどによって世界中で知識を共有し、それを手段として、環境問題など世界的または国内の問題を解決していく時代になったと言って賛同を得たのですが、他の国と対等に知識を共有しようとする、その国の「知識の拠点」が大事になってきます。たとえば国立国会図書館がアーカイブの機能をもつと同時に、著作権や編集権の問題についても研究して下さるとありがたいと思います。

長尾 国際的連携というのは大きな課題ですね。大学間では国際的な連携が進んでいると思いますが。

安西 学生や研究者の交流はかなり進んでいます。環太平洋大学協会の会長をやっていたのですが、これからは環太平洋圏の学術交流、教育交流が重要ということで、たいへん積極的な活動をしております。ただ、知識を共有しようという話はあるのですが、図書館の資料をフリー(無料)で貸借するかインターネット上で公開するということは、実際にはこれからだと思います。

長尾 国立図書館でも、世界の国立図書館長会議のほかにアジア・オセアニア地域国立図書館長会議というのがあります。知識をシェアリングしたいとは言っているんですが、具体的にはまだこれからですね。オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールなどは、やはり英語圏ということもあって非常にがんばっていますね。日本は意欲はあるけれども、日本語というバリアがあって。

安西 なるほど。館長は電子図書館と機械翻訳のパイオニアでいらっしゃるから、ぴったりだと思いますが。

長尾 (笑)もう一つは、漢字文化圏ということで中国・韓国の国立図書館と交流をもっておりまして、お互いのデータを横断検索できないかなど検討しているんですが、具体的に使えるところまではまだ行ってないですね。

安西 情報技術という面では、持ち運びできる紙の本と、パソコンや携帯電話端末の違いはまだ大きいように思います。

長尾 これからどうなっていくますかね。米国ではアマゾン社のキンドル(Kindle)という読書端末が出たとか、紙をやめて電子版だけにした新聞社があるそうですが。

安西 私も紙の世代ですが、確かに若い世

代はもう画面上だけで暮らしていますね。

長尾 抵抗ないみたいですね。

安西 はい。それが当たり前になってしまうかもしれませんね。

長尾 そういった中で出版産業や大学教育における書物の位置づけ、電子図書館はどうなっていくのか。

文系では今までと同じように、紙がものすごく大事で文化財的なものが尊重されているけれども、理系では論文なんかどんどんデジタル化して、流通はたいへんな状況になっていますよね。

安西 私は北海道大学では文学部に在籍しております、そのときの思い出として、文学部には写真製版より活版が好きだという方が多かったですね。肌ざわりが違いますでしょう。活版のほうが柔らかいし、見た目も肌ざわりも人間らしいのですね。一方で、館長がおっしゃるように、学術論文の著作権を企業が寡占する時代になっていまして、大学は電子ジャーナルの費用で財政的に圧迫されて大変な状況です。

長尾 文系の学問というのはじっくり時間をかける性格が強いものに対して、理系は一刻を争う、先取権を主張するために情報をなるべく早く発信しようとして、どうしても情報ネットワークの世界に生きることになる気がしますね。

先生は文部科学省の中央教育審議会などで大事な役をしてこられましたけど、読書離れがいられているなかで、教育の観点から図書館はどうあるべきでしょうか。

安西 図書館あるいは図書の問題をぜひテーマにしたいとは思っていますが、なかなかそこまで行っておりません。

子どもの読書離れがいられている中で、現場の小学校等ではかなり読書運動が起こっているのではないのでしょうか。小さい頃から本に親しむということはとても大事だと思います。私自身小さい頃から本が好きで、図書委員などもしておりました。

学校図書館への公的な支出は都道府県でも結構ばらつきがありますね。その問題が議論に出ることはあるのですが。

長尾 そういうインフラにあたるようなところが理解されてお金が出てくるといいんですが、なかなか進みませんね。米国でも最近図書館の予算が減らされていると聞きます。日本の市町村の図書館はさらに苦しい立場にあります。

安西 慶應では今、湘南藤沢キャンパスが中心になって、東南アジアの12か国20数大学、研究機関と、インターネットを介して教材等の共有をしております。

長尾 それは英語でやっているのですか。

安西 はい。それから遠隔学習のソフトウェアもありまして、相互交流もずいぶんやっております。慶應としてはそういう活動と書物、知識が結びついていくといいなと思いますね。ただ、いわゆる人文社会科学系の、紙の書物を尊重する文化も大事ですので、その両立を継続していかなければなりません。

長尾 大学図書館が大学の中でもっと大きな役割を果たしてくれればいいんですけどね。

安西 欧米、例えば米国のハーバード大学のワイドナー図書館 (Widener Library) などは風格があって、学問をするところだという象徴としてもたいしたものだなと思います。日本の場合も、大学の教育研究の質の

向上ということと密接に関係すると思います。もう少し落ち着いて勉強ができるところにならないと。

長尾 ハーバードの図書館予算は、東大や京大の10倍近いですからね。

安西 そうでしょうね。

長尾 米国議会図書館は国立国会図書館の3倍くらいの規模の予算で、英語だけでなく世界中の出版物をきちっと集めている。ジャカルタなどに海外事務所を置いてアジアの出版物を収集していたり、世界全体に目配りをしています。これからの国際社会における日本、その日本の国立図書館として、我々ももっとがんばらないと。

安西 高等教育への財政支援も、日本は本当に少ない。よく「教育予算がOECD加盟国中最下位」といわれますね。日本の学問・文化のインフラについて、私たちが共闘路線で声を上げていかないと。現在は世界的な不況で、どうやって食べていけばいいかという声が非常に強いですが、書物とか教育が、人間にとって、あるいは日本にとって本当に大事なのだという声が消えてしまうといけないと思います。

長尾 最後に先生の今後の抱負をちょっと聞かせていただけますでしょうか。

安西 日本に住む人たちが、誰でも自分の能力を見つけ出し、その能力を通して他者に貢献して、それを糧にしていける。それが自分の喜びとなる人生を歩めるような社会にしていかなければいけないと思います。そのときに大事なことは、どうすれば自分の夢を実現できるような知識を得られるかということです。知識の得方自体を知らないというか、どうしたらいいかわからないという人たちが

増えているような気がします。それが今一番気になっていることです。さっきも申し上げましたが、知識というのは、断片的にばらばらに覚えることはできないのです。自分自身で体系立て、結びつけて覚えていくわけで、そういう方法を身につけていかなければならない。そのためには図書館はものすごく大事なところだと思いますし、国立国会図書館は日本の知識のフラッグシップのような機関であってほしいと思っております。抱負というより期待です(笑)。

長尾 ありがとうございます。「知識は我らを豊かにする」という標語は心の豊かさ、創造力を発揮するという意味で言っております。大学や図書館の活動がすべての人々にとって心を豊かにする源泉でなければいけないと思いますね。

対談を終えて

慶應義塾は福澤諭吉の建学精神を大切にしてきた日本で一番古い大学である。その塾長を長く務め、広い視野をもち、世界を相手に活躍しておられる先生の発言に教えられるところが多かった。知識は力であり、教育は物事を考えさせる力をもたせることであって、そのためにも知識の集積の場である図書館をもっと充実し、活用されるよう努力する必要があるし、またグローバル化がますます展開してゆく時代に国立図書館の国際的な連携を進めてゆくことが大切であると考えさせられた。(長尾)

(この対談は2009年6月16日に国立国会図書館で行われました。)

国立国会図書館年報 1年がつまった1冊



国立国会図書館にはどんな資料がどのくらいあるのか？ どの部署があり職員は何人いるのか？ インターネット上でどのようなサービスを提供しているのか、それらに年間どのくらいアクセスがあるのか？ このようなことを調べるときに役に立つのが『国立国会図書館年報』です。衆参両議院の議長に対して館の活動を報告するもので、この1冊に、当館の1年の動き、行事などの記録、統計、その年度に制定された法規、活動評価の報告がまとまっています。

『年報』の作成は、3月ごろから始まります。その年度のできごとを調べ、目次をつくり、その目次にそって担当者が分担して原稿を執筆します。統計が5月末にまとめ、語句や体裁を統一し、索引をつけるなどして、約半年かけてできあがります。

『年報』は開館当初から刊行しており、当館でもっとも歴史の長い刊行物の一つです。最初の昭和23年度版は83ページで現在の約3分の1、「国立国会図書館の設立と開館」の章や手書きのグラフ、チャート図などが時代を感じさせますが、「国会に対する図書館奉仕」の章など、

古めかしい言い回しながら、基本的な役割は変わらずに続いていることがわかります。

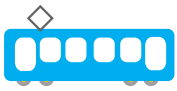
毎年あまり変わらないように見える『年報』ですが、時代の変遷とともに、また、読みやすさを考慮して、全体の構成を少しずつ変えています。最近では、平成17年度版から、専門的な言葉に解説をつけたり、写真を入れるなどの見直しを行いました。これまで文字どおり「白書」だった表紙に写真が入ったのも平成17年度版からです。この9月に刊行する平成20年度版は、開館60周年記念行事を表紙にしました。

『年報』は当館で閲覧できるほか、全国の都道府県立・指定都市立図書館、一部の大学図書館にお送りしています。ホームページには10月中旬に掲載する予定です。国立国会図書館について調べたいことがあるときは、『年報』をぜひご覧になってみてください。



編集作業に赤ペンは欠かせません。

(総務課編集係 火の車)



出発進行!

「のりもの」本めぐりへ



「ふたごのでんしゃ」 渡辺茂男作 堀内誠一絵 あかね書房 1969年

開催
期間

7月18日(土)～平成22年2月7日(日)
国際子ども図書館 3階 本のミュージアム

国際子ども図書館では、平成22年2月7日(日)まで、展示会「出発進行!『のりもの』本めぐりへ」を開催しています。子どもたちが大好きな「のりもの」の本の展示会です。所蔵資料を中心に、国内外の作品約250点を展示しています。

子どもから大人まで、みなさんに楽しんでいただけるような展示会になっています。「のりもの」本めぐりをどうぞお楽しみください。

子どもと「のりもの」の本

子どもにとって「のりもの」は、大きくて、スピードが速くて、カッコいい、とても魅力あふれる存在です。自分ひとりでは行けない場所へも連れて行ってくれる、楽しく、心強い仲間でもあります。また、子どもたちは新しい乗り物に大変興味をもちます。そのため、児童書には、その時代の最先端の乗り物が、それを取り巻く社会の様子も含めて描かれていることが多いのです。

展示の構成

メインテーマとして、鉄道、船、自動車、飛行機を取り上げました。それぞれの乗り物のあゆみを紹介するとともに、鉄道の駅、働く車、船の冒険や漂流、大空へのあこがれなど、様々な切り口から個性あふれる本をご紹介します。

特別コーナーでは、魔法の乗り物や宇宙の乗り物、自転車を題材にした本や、明治時代の乗り物絵本、しかけ絵本などがご覧になれます。

このほか、鉄道博物館からお借りした、1号機関車（日本で初めて走った蒸気機関車）とA型フォード1903年式（アメリカのフォード社が初めて製造したモデル）の模型も展示しています。

展示資料の一部は、手にとってご覧になれます。



鉄道

鉄道の始まり、蒸気機関車、路面電車、地下鉄、新幹線、駅、鉄道の旅、変わった電車、鉄道と作家たち

18世紀後半、イギリスの産業革命で大量輸送の必要が出てきたことをきっかけに、鉄道が発達しました。利便性や安全性を追求し、蒸気機関車、路面電車、地下鉄、新幹線など、様々な種類の鉄道が開発されていきます。



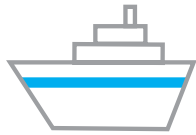
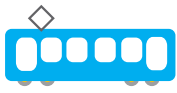
『こととあき』 林明子さく 福音館書店 1989年

そういった鉄道の歴史を、絵や写真でわかりやすく解説している本のほか、自分の意思で線路を勝手に走り出してしまう『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』、電車で出かけるぬいぐるみと子どもを描いた『こととあき』、廃止される路面電車が「こどもとしょかん」として再利用されることになった『ふたごのでんしゃ』のほか、新幹線の本、一風変わった電車を描いた本なども紹介しています。

なお、『ふたごのでんしゃ』の中で、路面電車を「こどもとしょかん」として再生した一場面をタペストリーとして、展示会場外壁に飾っています。



会場内は撮影禁止ですが、ここでは記念撮影ができます。



船

人力から風力へ、大航海時代、汽船の登場、船にまつわる発明・発見、漂流・事故、働く船、生活とともに、あこがれて、いざ冒険へ、ぼくは海賊、船に猫、みんなで乗りたい、船と作家たち

最も長い歴史をもつ乗り物が船です。流木につかまって川を渡ったことに始まり、少なくとも紀元前1万年には丸木舟や葦舟が利用されていました。その後、帆船が登場し、15世紀半ばにはヨーロッパの国々が続々と新航路を求めた大航海時代を迎え、帆船の時代が長く続きます。そして蒸気機関の発明により汽船が登場していきます。

船の登場する本は非常に多く、海洋冒険小説や冒険家、探検家の伝記が昔から出版されています。『宝島』『ミノー号の冒険』などの冒険ものをはじめ、働く船を描いた『しょうぼうていしゅつどうせよ』や、みんなでわいわい船に乗る『ガンピーさんのふなあそび』などを展示しています。



『しょうぼうていしゅつどうせよ』
渡辺茂男さく 柳原良平え 福音館書店 1998年



自動車

自動車の始まり、日本の自動車、マイカーとスーパーカー、事故・社会問題、交通ルール、これからの自動車、みんなで乗りたい、働く自動車、作りたい・運転したい、自動車と作家たち

1769年、世界最初の自動車とされている、蒸気で走る三輪自動車がフランスで発明されました。その後、100年以上を経て、今日の自動車の原型となるガソリン車がドイツで誕生します。20世紀になると、自動車の開発や大量生産が進み、一般の人々にとっても身近な乗り物になっていきました。急速に自動車が普及する一方で、交通事故も増加し、環境問題が発生しました。

自動車は、毎日目にする、とても身近にある乗り物だけに、子どもの本にもたくさん登場します。『車のいろは空のいろ』『のせてのせて』『しょうぼうじどうしゃじぶた』など、よく知られている本のほか、車社会の問題点や交通安全への願いをこめて描かれた『さらばハイウェイ』『手おし車大戦争』や、『指輪物語』で知られるJ.R.R.トールキンが自ら絵も手がけた『ブリスさん』などを展示しています。



『しょうぼうじどうしゃじぶた』
渡辺茂男さく 山本忠敬え 福音館書店 1966年



子どもが楽しめる工夫

この展示会では、子どもにも十分楽しんでもらえるよう、工夫を凝らしました。まず、解説パネルやケース内の見出し、本のキャプションなどは、子どもたちが自分で読んで理解できるように、なるべく平易な表現を使い、難しい漢字にはふりがなをつけています。パネルのデザインも、子どもたちの目を引くような、やさしい、かわいらしいデザインにしました。

また、子どもたちの目線の高さに合わせて、解説パネルよりも低い位置に、子ども用のパネルを設置しました。このパネルは、展示資料を見ながら、考えたり、探したりできるように工夫されています。



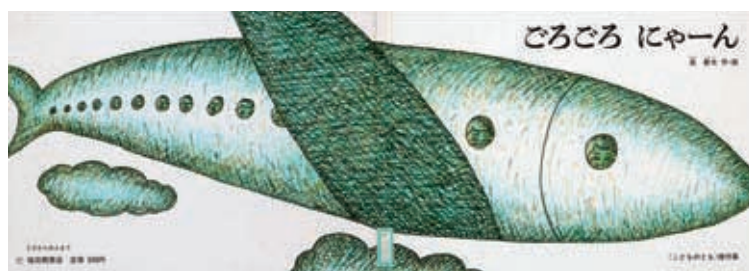
飛行機

鳥のように飛びたい、動力飛行の始まり、ジェット機の登場、飛行機の旅、大空へのあこがれ、空想のつばさ、気球と飛行船のあゆみ、気球、飛行船、ヘリコプターに乗って、飛行機を作る、飛行機と作家たち

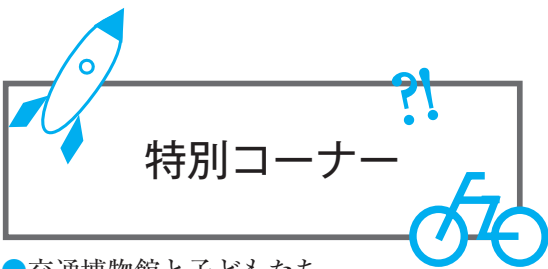
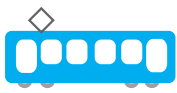
古代ギリシアのイカロス神話にも登場するなど、空を飛ぶことは人類の昔からの夢でした。レオナルド・ダ・ビンチは、「飛ぶこと」を科学的に研究した最初の人といわれていますが、実際に空を飛ぶことはできませんでした。

今から200年ほど前に気球で空を飛ぶことに成功し、飛行機で飛ぶことができたのはつい100年ほど前の1903年、ライト兄弟が最初です。

ここでは、飛ぶことに挑み続けた人たちの伝記をはじめ、飛行機がより速く安全に飛ぶ仕組みを解説した『ひこうき』や、おばあさんが毛糸で編んだ飛行機で空を飛ぶ『おばあさんのひこうき』、猫が魚型の飛行船に乗る『ごろごろにゃーん』のほか、気球、ヘリコプターなど、さまざまな「飛ぶ」本を展示しています。



『ごろごろにゃーん』
長新太作・画 福音館書店 1984年



特別コーナー

●交通博物館と子どもたち

かつて東京・神田にあった交通博物館にまつわるコーナーです。

●修学旅行列車

鉄道博物館からお借りした昭和30年代の修学旅行のしおりや、修学旅行列車のプレートなどを展示しています。

●しかけ絵本

とびだす絵本や、車輪が付いた『機関車トーマス』の絵本、付属の自動車を走らせることができる『ちびっこきかんしゃチューチュー』など、見て、遊んで楽しめる絵本を展示しています。

●乗り物絵本

明治期に出版された、色鮮やかに最新式の乗り物を紹介した絵本や、乗り物絵本の黄金期に活躍した木村定男、小山泰治、中島章作、安井小彌太などの乗り物画家たちが描いた本を紹介します。



『あたらしい汽車』
大森太郎文 安井小彌太絵 ますみ書房 1948年

「汽笛一声新橋を…」で知られる『地理教育鉄道唱歌 第1集』もここに展示しています。



『地理教育鉄道唱歌 第1集』
大和田建樹作歌 上眞行、多梅稚作曲
三木佐助 1900年



よく知られている曲(右)のほかに、別の曲もあったことがわかります。
(展示会場では表紙部分を展示しています)

●自転車

自転車の歴史や仕組みを紹介したもの、自転車に乗れるようになった喜びを描いた『ロッタちゃんとじてんしゃ』など、自転車が登場する本を集めました。



『ロッタちゃんとじてんしゃ』
アストリッド=リンドグレンさく
イロン=ヴィークランドえ
やまむろ しずかやく 偕成社 1976年

●宇宙

宇宙開発にまつわる話や美しい宇宙の写真がいっぱいの科学絵本など、宇宙への憧れが詰まったコーナーです。



『ミラクル・ベイビー』
サイモン・ジェームズさく 小川仁央やく
評論社 2004年

●あの世とこの世をつなぐ乗り物

三途の川を渡る舟や、妖怪籠車、ドイツのおぼろぐるまの幽霊船の話など、ちょっと怖いコーナーです。

●魔法の乗り物

おなじみの魔法のじゅうたんやほうきのほかに、白やトランクで空を飛ぶ話もあります。



関連イベント

- ・10月4日（日）に乗り物絵本研究家・関田克孝氏による講演会「乗り物絵本の歴史と魅力」を開催します。
 - ・11月15日（日）に展示会担当職員によるギャラリートークの開催を予定しています。
- 詳しくは、国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) をご覧ください。



この展示会の監修は、財団法人交通文化振興財団専任学芸員（当時）の佐藤美知男氏にお願いしました。
（国際子ども図書館「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」展示班）

公共図書館が国立国会図書館に期待す

国立国会図書館は、図書館員向けの研修や、総合目録ネットワークなどの各種事業を通して、第一線で利用者にサービスを提供する公共図書館等へのサポートを行っています。

このような国立国会図書館の事業は、公共図書館において、どのような評価を受けているのでしょうか。また、様々な変化を迫られている公共図書館の現場において、国立国会図書館に対しどのような期待が寄せられているのでしょうか。

国立国会図書館では、都道府県立図書館、政令指定都市立図書館に対し、当館の図書館向けサービスに対するご意見、当館に期待すること、公共図書館が共通して抱える課題等についてアンケート調査を行いました。

その結果を参考に、7月9日に開催した平成21年度「国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会」において、「国立国会図書館に期待すること」と題してグループディスカッションを行いました。総勢74名の参加者が参加したこのディスカッションは、45回目を迎える同懇談会において初めての試みでしたが、どのテーブルからも活発な議論を繰り広げる声が聞こえ、短い時間ではありましたが充実した意見交換が行われました。

ここでは、特に多くの意見が寄せられた「研修」と「地域資料のデジタル化」を中心に、公共図書館から寄せられた当館への期待、要望、公共図書館が抱える課題についてご紹介します。

1 図書館員を対象とした研修

国立国会図書館が行っている図書館員を対象とした研修は、大きく三つの形式に分かれます。集合研修、遠隔研修、そして派遣型研修です。

集合研修は、参加者が当館に集まって研修を受ける従来型の研修です。

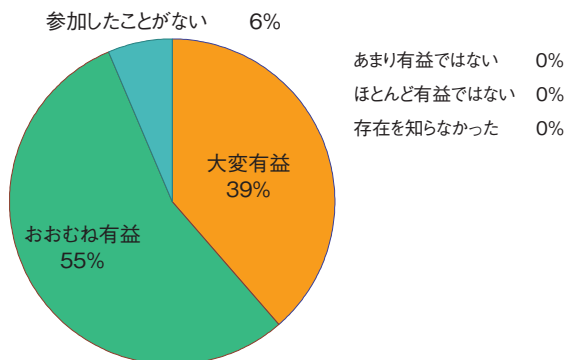
遠隔研修は、インターネットを利用してパソコン上で行う研修です。インターネットに接続できるパソコンがあれば、どこからでも受講できるので、参加者が当館まで出向く必要はありません。

そして、平成20年度から始まったのが、研修テーマを設定し、そのテーマでの研修を希望する図書館を公募する派遣型の研修です。当館の職員を講師として各地の図書館に派遣し、レファレンスに関する研修を行っています。

事前アンケート調査においても、ディスカッションにおいても、研修に対するコメントが多く寄せられました。

事前アンケート調査の結果では、「大変有益」「おむね有益」の合計が94%を占め、高い評価を

ること



当館の研修について 事前アンケート調査の結果から受けていることがわかりました。

その一方で、研修に対する要望も多く寄せられました。その一部を以下にご紹介します。

- 財政が厳しく、研修については近年参加が少ない状況だ。
- 予算面も配慮の上、県や政令指定都市単位の講習会や研修会を開催してほしい。

現在の研修についての不満の声もあります。

- 講師派遣はテーマがレファレンスに限られているため依頼しにくい。
- 枠が少ないため参加できなかったことがある。少人数の研修は回数を増やしてほしい。

ディスカッションでは、前半のプログラムにおいて派遣型研修の報告が行われた直後だったこともあり、特に派遣型研修に高い関心が寄せられました。

- 周知が足りないのではないか。
- 研修の申込みにはできるだけ応えてほしい。

その他、研修について、以下のような意見が出されました。

- 研修の地方開催に力を入れてほしい。
- 団塊世代の退職で司書の専門性が弱くなっているため、国立国会図書館の研修に期待している。

アンケート結果と懇談会での議論の双方から、特に派遣型研修の充実への強い要望のあることがわかります。予算不足、人員不足といった問題により、参加が難しくなっている現実がある中で、職員の専門性の養成という問題に対応するため、参加側にとって負担にならない形で受けられる研修の拡充が期待されています。

このような要望に可能な限り応えられるよう、当館では引き続き研修の充実に努めていきます。

国立国会図書館が行う図書館員を対象とした研修の情報は、当館ホームページでご覧いただけます。

- http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/library_training_guide.html
国立国会図書館ホームページ > 図書館員の方へ > 図書館員の研修

2 地域資料のデジタル化

研修と並んで期待が多く寄せられたのは、デジタル化に関する国立国会図書館からの支援です。

多くの公共図書館が、貴重な古典籍資料、郷土資料を所蔵しています。資料保存の観点から、そして利用サービス向上の観点からも、それらの資料のデジタル化は有効な手段ですが、それには予算や人員の問題があります。デジタル化のための著作権処理の作業も大きな負担となります。

アンケート結果では、この点での当館の支援に期待する声が多く寄せられました。

- 必要な手続きや作業のノウハウの共有などにより、地域資料のデジタル化を支援してほしい。
- 古文書・地域資料のデジタル化の費用が高額で、単館では捻出できない。国立国会図書館でまとめて電子化し、インターネットで検索、閲覧できるようにしてほしい。
- 国立国会図書館で地域資料をデジタル化した場合は、その地域でコピーを所蔵できるとよい。

今後を見据えて形式の標準化を図ってほしいという意見もあります。

- 国立国会図書館で調査したうえで、デジタル化フォーマットを統一できないか。
- ファイル形式や様式などについて推奨形式を決めれば、将来全国の地域資料デジタルライブラリーとして一括して運営しやすいのではないか。

ディスカッションにおいても、すべてのグループがデジタル化の問題を取り上げました。アンケート結果と同様に、国立国会図書館への期待が多く寄せられました。また、少し違った観点からこの問題を取り上げる声もありました。

- 図書館においては、何をデジタル化するのかということ十分に吟味する必要がある。
- 公共図書館では、書庫スペースの不足や蔵書の拡大により、資料を廃棄せざるを得ないという問題も起こっている。そのような問題にも関連して、デジタル化の推進を考えてみてはどうか。
- デジタル化の推進に関する情報交流の場、調整のための会議の場を設けると良いのではないか。

国立国会図書館では、デジタルアーカイブの支援や標準化の推進のための協議会を立ち上げることを検討中です。また、博物館など類縁機関を含めたアンケート調査を実施し、実情の把握に努めます。平成17年度には『国立国会図書館資料デジタル化の手引き』として作業手順のマニュアルを公表しました。

- <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/pdf/digitalguide050330.pdf>
国立国会図書館ホームページ>国立国会図書館について>資料デジタル化について

3 その他の要望

上記のほかにも広範囲にわたる当館への意見、要望が寄せられ、国立国会図書館への期待の大きさがうかがえる結果となりました。

その一部をご紹介します。

- 国立国会図書館と公共図書館との連携強化
 - ・国立国会図書館とのやり取りを行う協力担当者を各県立図書館に置く
 - ・実務担当者レベルでの意見交換の場を設定する
 - ・人事交流
- 図書館の地位向上のための活動
 - ・図書館の役割や有益性を広く一般に知らせる啓蒙活動をしてほしい
 - ・図書館政策の企画立案を主導してほしい
 - ・利用マナーの低下に対して図書館が正しく国民に認知されるためのキャンペーン・講座等を行ってほしい
- 書誌データに関する要望
 - ・データ提供までの期間短縮
 - ・雑誌記事索引や博士論文の目次情報等書誌情報の充実
 - ・JAPAN/MARCの無料化、迅速化
- 図書館間貸出しの冊数限度の緩和
- 資料収集
 - ・納本制度の周知徹底
 - ・外国語資料の充実

なお、当館のサービス等について、次のようなものが「役立つ」という評価をいただきました。

- ホームページ上で、調べものをする際に役立つ情報を提供するもの（「リサーチ・ナビ」「レファレンス協同データベース」など）
- 図書館界、図書館情報学に関する国内外の情報収集・提供（「カレントアウェアネス・ポータル」など）
- NDL-OPACの書誌データダウンロード機能

4 公共図書館が抱える課題

事前アンケートでは、現在公共図書館が抱える課題について伺いました。最も多いのは、先に述べた予算・人員の削減です。資料費だけでなく、運営費にも削減を求められる中で、公共図書館どうしの連携や情報交換、都道府県立図書館と市町

村立図書館との役割の明確化が必要との声がありました。また、資料の保管スペースを確保しにくくなっていること、目録作成のノウハウや古文書等の貴重資料の扱いなど、図書館員がもっていた知識や技術が継承されないことへの危機感が示されました。

当館では、公共図書館をはじめとする国内の図書館とのより密接な連携、協力の推進に努めていきます。貴重なご意見をいただいた各図書館のご協力に感謝申し上げます。

(総務部支部図書館・協力課)



7グループに分かれて行われたディスカッション

第4回 書庫の環境を整える (2)

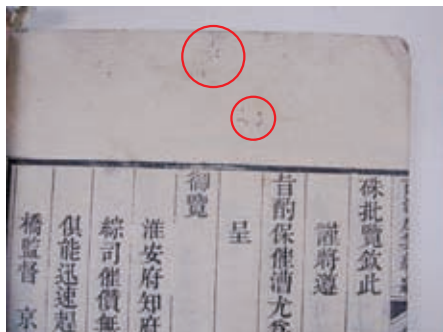
今回は、資料を守るための環境管理について設備以外の観点からご紹介します（設備については前号参照）。

1 IPMによる書庫の管理

図書館の書庫には、カビや有害な虫（文化財害虫）が発生することがあります。これらを防ぐには、人体や環境保護のためにできる限り薬剤に頼らず、複数の方法を組み合わせて管理するというのが、文化財保存の分野における基本的な考え方です。これをIPM（Integrated Pest Management 総合的有害生物管理）¹と呼びます。IPMは、1960年代に農薬に頼らず害虫を防除する方法として始まり、1990年代に入り、博物館・美術館等の文化財保存の分野において適用されるようになった概念で、近年、図書館にも浸透しつつあります。

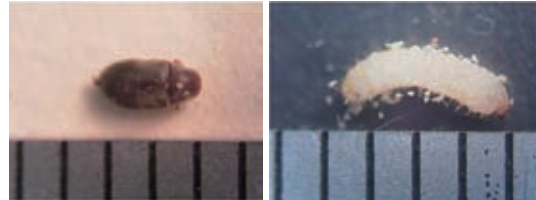
2 カビと文化財害虫

我が国は気候が温暖多湿で、カビや虫が生育しやすい環境にあります。虫の種類や個体数も多く、年間の活動期間も長いので、被害が大きくなりがちです。文化財損傷の原因の中で、虫害はきわめて重大なものです。



虫に食われた本（上）とカビの発生した本（下）。

文化財害虫の例



シバンムシの成虫（左）と幼虫（右）。1メモリは1ミリ。



チャタテムシ。大きさは3ミリ。

カビは生育すると胞子をつくり、それらの胞子が空気の流れに乗って運ばれ、あらゆる場所に付着します。付着した場所に適度の水分・栄養分と温湿度が備わっていれば、さらに胞子を再生産して拡大していきます。高松塚古墳のカビ被害については記憶に新しいところですが、図書館においてもカビ被害にあう書庫は少なくありません。文化財の中でも特に図書館資料は、紙、皮革、布、糊など有機素材の使われているものが圧倒的に多いので、カビや虫の餌や営巣場所となりやすいのです。

これまで害虫の駆除には臭化メチルが使われていましたが、臭化メチルは1992年の「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書締約国会合」においてオゾン層を破壊する物質に指定され、2004年末をもって使用禁止となりました。そのため、文化財害虫の駆除は、従来の薬剤を使う方法から、環境や人体に優しい新しい方法へと変革を迫られています。このような状況のもとで、先に述べたIPMによる管理が重要となってきているのです。

注

- 1 木川りかほか 博物館・美術館・図書館等におけるIPM—その基本理念および導入手順について 『文化財保存修復学会誌』(47) pp.76-102
- 2 同上
- 3 このトラップ調査の結果は、第19回保存フォーラムで報告しています。本誌572(2008年11月)号 pp.32-33参照。

3 IPMの推進

国立国会図書館は、納本制度により国内の出版物を収集し後世に伝える役割を担っています。また、帝国図書館から引き継いだ資料をはじめ、貴重な資料を多数所蔵しており、書庫の清掃や温湿度管理など、資料の保存については常日頃から細心の注意を払ってきました。しかし、平成19年度に東京本館の本館書庫の一部でカビが発生したため、IPMの考え方を本格的に導入してカビ対策を強化しました。これまでも個別の被害事例には対応していましたが、さらに組織的に取り組んでいこうというものです。「IPMとは、戦いながら(fighting)、うまくつきあうことである。」²とされるように、カビや虫を根絶することはできませんが、それを常に監視して許容範囲に抑えることは可能であり、そのための取組みが必要なのです。

このため、当館では、資料の受入・管理、施設管理の担当者が定期的に対策を協議する場を設け、注意喚起や情報交換に努めています。また、カビ対策の一環として、専門家に相談しつつ、①書庫内にデータロガーを設置して温湿度をモニターする、②定期的に書庫を巡回する、という手段でカビの発生を監視しています。

虫害についても、特に虫が好む和紙資料を収めた書庫を対象に、平成18年10月からトラップ調査(捕虫用粘着トラップによるモニタリング)を定期的に行い、虫の発生状況を調査しています。この調査によれば、現在、当館では、小規模の虫の発生は見られるものの、憂慮すべき状態ではありません³。

これらの地道な努力により職員のカビ・虫害対策への理解を深め、環境保全を意識するようになっています。できるところから一つ一つ対策を進めていくことがIPMの実践であり、カビ・虫が侵入、生息しにくい書庫環境の整備へ確実につながっていくと考えています。

(収集書誌部資料保存課)

■書庫内にデータロガーを設置して、温湿度をモニターしています。



■定期的に書庫を巡回し、カビの発生を監視しています。



■特に虫が好む和紙資料を収めた書庫を対象に、トラップ調査を定期的に行っています。



虫眼鏡で念入りに観察します。

書庫にしかけられたトラップ



本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

多摩動物公園 50 年史／資料編

東京都・財団法人東京動物園協会編・刊
〒110-0007 台東区上野公園 9-83 恩賜上野動物園内
2008.5 229 頁／126 頁 B5
<請求記号 RA12-J10 / RA12-J11 >

子どものころ、動物園で象やキリンなど、それまで図鑑でしか見たことのなかった動物を目の当たりにして、驚きと興奮を覚えた経験をおもちの方は多いことと思う。動物園は、様々な種類の動物を観覧に供する施設であるが、個々の動物園の設立の目的や活動の詳細については、あまり知られていないのではあるまいか。

本書は、平成 20 年 5 月 5 日に開園 50 周年を迎えた多摩動物公園の 50 年のあゆみを詳説したものである。本書は 3 部に分かれており、さらに別冊として「資料編」がある。

第 1 部「歴史編」では、多摩動物公園が上野動物園の分園として開園するまでの事情から始まって、動物公園が充実していく過程や最近の展開に至るまでのあゆみが記されている。

第 2 部「項目編」には、最初に、歴代園長の文章が収められている。そこでは、在職中の活動や思い出が語られており、独自の特色をもった動物公園にするために歴代園長が苦心した様子を知ることができる。また、「動物の飼育史」では、飼育されてきた動物の記録が詳細に示されている。各々の動物について写真と動物公園での生育の記録やエピソードが紹介されていて興味深い。例えば、チンパンジーについては、その飼育の始まりからタレント活動の様子や繁殖の管理等について記されている。また、チンパンジー島からチンパンジー村、そしてチンパ



ンジーの森へと、飼育展示施設の変遷について説明されていて、動物をより自然な環境の中で生活させるとともに来園者にも観覧しやすい工夫を重ねてきたことが理解できる。そのほか第 2 部には、「多摩動物公園における収益事業」と「教育普及活動」について記されている。

第 3 部は年表で、多摩動物公園の 50 年間の歴史が、社会一般の出来事と対照できるようになっている。

別冊の資料編は、飼育データの一覧や植物目録等、多摩動物公園に関する詳細なデータが収められている。口絵に載っている入場券の変遷やポスター、パンフレットの写真は、見ていて楽しく懐かしい気持ちになる。

以上のように、本書では多摩動物公園の活動全般に関して大変詳しい記述がなされている。これによって、多摩動物公園が、単に動物の展示をすることだけでなく、動物の生育に適した環境を保持し、繁殖力を促進し、絶滅の危機にある動物の種を保存するという役割を担っていることが理解できる。

多摩の里山や雑木林の環境を活かし自然との融合を標榜する多摩動物公園が、今後どのように変化・発展を続けるのか、その将来の姿に様々な期待を抱かせる一冊である。
(矢部 明宏)

江戸の花屋敷 百花園学入門 向島百花園創設 200 周年記念

東京都公園協会刊
〒160-0021 新宿区歌舞伎町 2-44-1 東京都健康プラザハ
イジア 9・10F
2008.3 143 頁 A4 <請求記号 KA434-J13>

国の名勝および史跡である庭園・向島百花園は、文化元（1804）年ころ、骨董商の佐原鞠塙^{まきこう}によって開かれた。大田南畝、亀田鵬斎、谷文晁、酒井抱一など、名だたる文人たちが集うサロンであっただけでなく、一般に公開され、多くの人々に愛されてきた。百花園の 200 周年記念出版物として、各種資料を取りまとめ、歴史・文化を集大成したという本書からは、同園の多様な姿を知ることができる。

開園当時の江戸は約 100 万の人口を誇り、都市化が進んでいた。そんな中、百花園がある向島は、江戸中心部から徒歩で日帰りできる距離にありながら田園風情豊かで、江戸の名所・隅田川を渡ってすぐという行楽に最適な場所であった。当初は文人たちが寄贈した梅で知られたが、四季折々の草花も植えられ、一年を通じて楽しめる庭となる。

鞠塙は、百花園の梅の品種を紹介した『梅屋花品』、百花園名物の春・秋の七草を考証した『春野七種考』『秋野七草考』などを文人たちの協力を得て出版し、話題を提供。広報も怠らない。

さらに、園内の梅で作られた梅干や、萩で作られた筆、隅田川焼といった土産物もあった。隅田川焼は、酒井抱一の依頼により尾形光琳の墓所修復のため京都に赴いた鞠塙が、尾形周平に作陶を習って帰郷後に創始した焼物である。鞠塙は、光琳の弟・乾

山にも心酔したようで、自ら出版した『すみだ川花やしき』には、隅田川焼が光琳や乾山の製法を受け継いでいることなどが記されているという。本書には都鳥のかたちをした香合や都鳥が描かれた皿などのカラー写真が



収められ、いずれもとても愛らしい。隅田川七福神巡りの発祥地も向島百花園とのことである。名所隅田川に、四季折々の草花が美しい庭、お茶、土産物、七福神巡り…と、楽しみいっぱいの庭園であった。

抜群の構想力や人的ネットワークによって、広く愛される新名所を作り出した鞠塙。しかし、入園料は無料で、開園後、間もなく経営困難に陥る。見かねた文人たちは、得意の詩や俳句を贈り、これを助けたという。その後の百花園の歴史にも、洪水による植物の死滅や東京大空襲による焼失など、数々の困難があったが、それらを乗り越えて今に伝えられているのは、いつの時代も百花園を愛する人々の力があったからといえよう。

本書は、百花園に関する入門書となるよう、できるだけビジュアルに、また、これまで同園が開催した講演の記録を活かすかたちで構成されたという。浮世絵、写真などの図版や、年表、人物相関図などの資料も豊富で、初心者にもわかりやすい。文人庭園、江戸の園芸文化、隅田川焼、石碑…と、多様なテーマから見える百花園も興味深い。本書を手引きとすることで、百花園の風情をより豊かに味わうことができそうである。

(村尾 優子)

蜀山人大田南畝 大江戸マルチ文化人交遊録

太田記念美術館編・刊
〒150-0001 渋谷区神宮前 1-10-10
2008.5 165頁 30cm×23cm <請求記号 KG248-J3>

流行の発信地として賑わう原宿表参道のすぐ裏に、太田記念美術館がある。ここは、1980年の開館以来、第五代太田清蔵のコレクションを中心に浮世絵の展示を行ってきた。本書は、2008年5月から6月にかけて開催された「蜀山人大田南畝 大江戸マルチ文化人交遊録」の展覧会図録である。

大田南畝（1749～1823）は、江戸時代を代表する文化人のひとりである。蜀山人のほかにも四方赤良、寝惚先生、山手馬鹿人など様々な雅号をもつ。一般には狂歌の作者として有名だが、

あなうなぎいづくの山のいもとせをさかれての
ちに身をこがすとは

これを現代人に面白がれと言っても無理だろう。しかし、南畝の才能は狂歌にとどまらない。19歳のとき、平賀源内の序文を得た狂詩集『寝惚先生文集』で、一躍有名になったのち、黄表紙、書画、浮世絵の画賛などその活躍は多岐にわたる。本書は、その多才ぶりを、視覚的に体感させてくれる。

副題に、「大江戸マルチ文化人交遊録」とあるとおり、平賀源内、山東京伝、北斎、歌麿などスター的な戯作者、絵師も登場してにぎやかだ。第4章で紹介される南畝の仲間の狂歌・狂詩作者たち――

もとのもくあみ やどやのめしもり とんやの
元木網、宿屋飯盛、問屋
さけふね
酒船など、雅号だけで
笑ってしまう。歌麿、北
斎、英泉らの浮世絵に狂
歌をつけたコラボ作品も
数多く紹介され、太田記
念美術館のコレクション
が威力を発揮している。



当代の人気者と交友したり、吉原の遊女を落籍したりと、戯作者の王道を行く暮らしぶりの南畝であったが、1786年、38歳のときに転機が訪れる。老中田沼意次の失脚に続いて、寛政の改革が始まり、町人文化への規制が強まったのだ。下級の幕臣であった南畝は、狂歌・戯作とは縁を切り、61歳で没するまで、本業の幕府官吏として精励することになる。このあたりの事情や、その後の幕臣生活が決して平穏でなかったことは、本書に掲載されている揖斐高「虚・実・画・俗の多面体」や小林ふみ子「笑はば笑へー政変期の南畝」に詳しい。

第七章には、「風流文雅の人」と題して、南畝の文人的な書画が集めてある。後半生の南畝は、サブカルチャーからアカデミズムへと復帰して、もっぱら幼時から得意とした漢詩文を作った。その枯淡ぶりを見ると、江戸文壇の寵児として戯作の世界に遊んだ華やかな青春時代が夢のようだ。

蜀山人の名もいまや忘れられつつあるが、町人文化と武家社会を行き来した南畝の人生航路は、江戸期の芸術家の一例として非常に興味深い。

（狂歌の引用は、岩波書店『大田南畝全集』から。）

はやし まさき
（林 雅樹）

漢字テレタイプ型入力機

国立国会図書館の業務機械化に伴い、昭和46（1971）年1月に導入された漢字テレタイプ型の日本語入力用の機器。



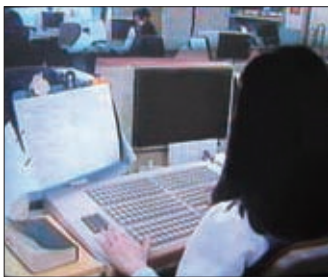
昭和53年頃使用していた入力機

現在のワープロソフトは「かな漢字変換による日本語入力」が一般的になっていますが、昭和46年当時のコンピュータは英数字情報を処理するもので、日本語情報は、新聞社のシステム以外ではほとんど扱われていませんでした。国立国会図書館では、書籍等の目録や国会会議録索引などの作成において、可能な限り固有名詞など元の文字

を記録しなければなりません。このため、多くの文字を扱う必要があり、システムの開発と機器の選定は国内でも草分け的な存在でした。処理文字種と機器選定のための種々の事前調査を経て、当用漢字、人名漢字などを含む3,965文字が選ばれ、漢字処理用の入出力機器が選定されました。

漢字テレタイプ型入力機の収容文字数は2,688字であったため、すべての文字を効率的に入力するために、以下の3種類の入力方式が採用されました。

- ①「14文字が収容された漢字キーボード」（写真右）と、「文字の場所を示すシフトキー」を同時に打鍵して盤面の文字を直接入力する。
- ②盤面上にない文字の入力のために、4桁の漢字コードを入力する。
- ③漢字を部首などに分解し、登録辞書を参照して該当文字を入力する。



平成5年頃使用していた入力機

データは専門のパンチャーによって入力され（写真左）、紙テープに出力されました。その後、国会会議録索引、和雑誌目録、雑誌記事索引、和図書（『日本全国書誌』、『JAPAN/MARC』）、蔵書目録システムが順次開発され、入力するデータは増え続けました。システムの改修と機器の更新を経て、現在はこの漢字テレタイプ型入力機からワープロソフト入力に移行し、専門のパンチャーによらない作業となりました。

こうして蓄積されたデータは、目録・索引の機械編集という当初の目的を超え、国立国会図書館蔵書検索・申込システム（NDL-OPAC）をはじめとする、国立国会図書館のサービスを支える基本データとして重要な役割を担い続けています。

（倉光 典子）

ドイツ政府機関図書館の連携協力

マリア・ゲッカーリッツ氏

(ドイツ・チューリンゲン州教育文化省図書館長)¹



はじめに

今年 2009 年はベルリンの壁崩壊 20 周年にあたります。東西ドイツの統合は、行政の歴史の中で先例のない変化の始まりでした。

ドイツは連邦制をとっており、現在、16 の連邦州 (Land) があります。各州はそれぞれ立法、行政、司法の機能をもっており、教育や文化については州独自の政策をとっています。

政府機関図書館のネットワーク

ドイツの政府機関図書館は、連邦および州の議会図書館、州政府図書館、連邦政府の地域図書館、連邦の機関の図書館のほか、公的な機関として商工会議所図書館や教会図書館なども含めて²、現在約 1,300 館です。州の政府機関図書館の運営はそれぞれの州に任されており、資金も州から得ています。政府機関図書館は、予算削減等で厳しい状況に置かれ、資料の購入等で他の図書館と協力していく必要に迫られています。

ドイツ国内の政府機関図書館の協力団体として、ドイツ議会・政府機関図書館協会³ (APBB) があります。ドイツ図書館協会を前身として 1955 年に設立され (1957 年に現在の名称に変更)、現在は 640 館が加盟しており、継続教育を中心に活動しています。APBB は、2004 年に「ライブツィヒ覚書」⁴ を公表し、電子情報時代における政府機関図書館の役割および直面する課題について、信頼できる情

報の提供、電子政府プログラムにおける役割、ネットワークの重要性などを提言しました。

ドイツの特徴として、州の図書館協力団体が活発に活動していることが挙げられます。ニーダーザクセン州のハノーバー政府機関図書館協会⁵ は、第二次世界大戦後の不安定な情勢の中で政府機関図書館を支援するため、1949 年に設立されたもともと歴史の長い団体です。現在は、加盟館で電子図書館を構築するほか、地域の公共・大学図書館等の協力組織や、ドイツの電子ジャーナルポータル EZB⁶ に参加するなど、積極的に活動しています。

私の所属するチューリンゲン州では、チューリンゲン政府機関図書館ワーキンググループ⁷ (ThABB) があります。当初の加盟館は 7 館でしたが、現在は 58 館が加盟しています。ThABB のおもな事業は、総合目録の構築、図書館システムの統合のほか、予算削減を目的とした、大学図書館との連携による電子ジャーナル等のコンソーシアム契約などです。また、図書館員の継続教育も重要視しています。

連邦行政機関のネットワーク

連邦行政機関のイントラネットワークとして、内務省が運営するベルリンーボン情報ネットワーク⁸ (IVBB) があります。首都機能がボンからベルリンへ移転し、行政機関が約 600km 離れたボンとベルリンに分かれて存在することになって、信頼性の高いネットワークで情報をやりとりするため

1994年に設立され、1999年の首都機能移転に伴い本格稼働しました。文書管理や各種データベースの提供のほか、テレビ会議などもこのネットワーク上で行われています。

2004年には、IVBB上に政府機関図書館のポータルサイトが構築されました。内務省が運営しており、22の連邦行政機関図書館の目録（約280万冊収録）の横断検索やオンライン・データベースのほか、さまざまな図書館サービスを利用することができます⁹。

これからの継続教育

政府機関図書館は、限られた予算と人員で、従来の印刷物と新たな電子メディアの融合したハイブリッド図書館へと変わらなければなりません。このためにまず必要なのは、現在の職員への投資です。APBBでは継続教育に積極的に取り組み、さまざまな教育コースを設けていますが、このような比較的小規模の団体が個々のニーズに応じた教育を行うためには、関係団体との協力が不可欠です。例えば、法律図書館協会、専門図書館協会、博物館・教会図書館協会などとの連携が考えられます。また、ウェブサイトを有効活用して、継続教育の情報を提供していく必要があります。

将来へむけて

政府機関図書館およびその職員の役割は、これ

から大きく変わっていくと思います。すべての政府機関図書館員は、効果的なコミュニケーションを学ばなければなりません。効率よく活動し、あふれる情報の中から必要な情報を選んで提供するという困難な課題を実現するために、他機関との協力とネットワークはとても重要なものです。

最後に、ある無名の方の言葉を紹介いたします。「あなたが変化を作り出さなければ、変化があなたを作り出すであろう（If you don't create change, change will create you!）」。ドイツの政府図書館は、変化を恐れてはいません。

(Maria Goeckeritz

訳・編 総務部支部図書館・協力課)

- 1 氏は、ドイツ議会・政府機関図書館協会の国際協力担当、IFLA政府機関図書館分科会常任委員でもある。
- 2 ドイツでは、商工会議所および教会は公法上の団体として認定されている。
- 3 Arbeitsgemeinschaft der Parlaments-und Behördenbibliotheken
- 4 Leipziger Memorandum (<http://www.apbb.de/memorandum.php>) 英語版も掲載されている。
- 5 Arbeitsgemeinschaft Hannoverscher Behördenbibliotheken
- 6 Elektronische Zeitschriftenbibliothek 1997年にレーゲンスブルグ大学図書館が開発した、ドイツ国内の図書館および研究機関の契約する電子ジャーナルの総合目録。2003年から米国議会図書館も参加している。詳しくは次の文献を参照。米澤誠 動向レビュー：学術的ポータルをめぐる動向 『カレントアウェアネス』282(2004.12.) (<http://current.ndl.go.jp/ca1542>)
- 7 Thüringer Arbeitskreis der Behördenbibliotheken
- 8 Informationsverbund Berlin Bonn
- 9 Der Beauftragten der Bundesregierung für Informationstechnik. Das Informations-und Bibliotheksportal im Intranet des Bundes. (http://www.cio.bund.de/DE/IT-Angebot/IT-Infrastrukturen/Bibliotheksportal/bibliotheksportal_node.html)

(この講演は、平成21年3月25日に第2回中央館・支部図書館協議会において行われました。)



お知らせ

■ PORTA のサービス拡大 — CiNii、JAIRO が検索 できるようになりました — 携帯端末用サイトを 試験公開しました

国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）では、8月12日、検索対象として、国立情報学研究所（NII）の論文情報ナビゲータ「CiNii」と学術機関リポジトリポータル「JAIRO」を追加しました。また、8月19日からは、PORTAの携帯端末用サイトを試験公開しました。

これまで PORTA の検索対象の多くは貴重書等の歴史的な資料を公開するデジタルアーカイブでしたが、CiNii、JAIRO が検索対象に加わったことにより、最新の論文、学術情報も検索・閲覧できるようになりました。

CiNii は学術論文情報を検索できる論文データベースです。PORTA では、CiNii で提供される情報のうち、学協会刊行物・大学研究紀要といった本文を閲覧できるものについて検索ができます。JAIRO は大学等の学術機関のリポジトリ（学術機関が自機関の学術情報を無料で公開するデジタルアーカイブ）に蓄積された学術情報を統合的に検索できるサービスです。

このほかに、水産総合研究センター図書資料デジタルアーカイブや慶應義塾図書館デジタルライブラリー等が検索対象となりました。8月末現在、45のデジタルアーカイブや目録類が PORTA から統合的に検索できます。

携帯端末用サイトの URL はパソコン用と同じです（携帯端末でアクセスすると自動的に携帯端末用サイトに転送されます）。デジタルアーカイブの検索・閲覧のほか、当館の和図書・和雑誌、雑誌記事索引等を検索することができます。

※検索結果からリンクする提供元のコンテンツは、携帯端末に対応しない場合があります。提供元のコンテンツはパソコンでご確認ください。

より便利になった PORTA をぜひご活用ください。

○ URL <http://porta.ndl.go.jp/>

○お問い合わせ先

国立国会図書館関西館 電子図書館課ネットワーク情報第一係

電子メール porta@ndl.go.jp

PORTA の「お問合せフォーム」もご利用ください。

お知らせ

■ 近代デジタルライブラリーで 15万冊以上の図書が 閲覧可能になりました



『建築写真類聚』
建築写真類聚刊行会編
洪洋社 大正9(1920)年・昭和18
(1943)年



『ふるさと』
島崎藤村著 竹久夢二画
実業之日本社 大正9(1920)年

近代デジタルライブラリーでは、当館が所蔵する明治期、大正期の図書を著作権処理を行った上でデジタル化し、本文の画像をインターネットを通じて提供しています。

8月25日、近代デジタルライブラリーに図書約7,800冊を追加しました。これにより、ご覧になれる図書の総数は15万冊を超えました。

今回追加した資料は、明治期の図書約1,300冊（約1,000タイトル）、大正期の図書約6,500冊（約5,800タイトル）です。大正期から昭和前期にかけて刊行された建築写真・図面集『建築写真類聚』は、大正期刊行分のうち約70巻をご覧になれます。このほか、今年で生誕150周年の坪内逍遙が訳を手がけた『真夏の夜乃夢』や、明治神宮が完成した年に刊行されたガイドブック『明治神宮案内』などが含まれています。追加した資料のリストは、近代デジタルライブラリーのホームページに掲載しています。

今後は、コンテンツのさらなる充実を目指して、大正期から昭和前期に刊行された資料について準備を進めていく予定です。

- URL <http://kindai.ndl.go.jp/>
国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)
> 電子図書館 > 近代デジタルライブラリー
- お問い合わせ先
国立国会図書館関西館 電子図書館課資料電子化係
電子メール kindai1@ndl.go.jp

お知らせ

■ NDL-OPAC の検索結果から他のデータベースへリンクするサービスを開始しました

使い方の例

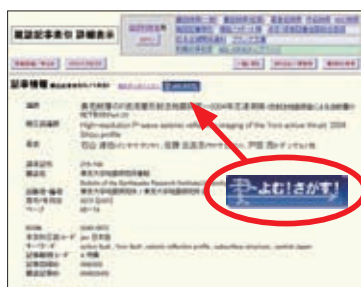


図1 「よむ!さがす!」をクリック



図2 「Database Linker」データベースへのリンクから「Free E-Journal」を選ぶ



図3 リンク先画面で巻号を選ぶと、本文が表示される

9月1日に、NDL-OPAC の検索結果から他のデータベースへリンクするサービスを開始しました。リンクボタン「よむ!さがす!」(図1)をクリックすると、「Database Linker」(図2)にその資料の本文や抄録を見られるデータベースへのリンクが表示され、それぞれのデータベースに直接アクセスすることができます(図3)。当館以外の機関での所蔵情報や、他のデータベースに収録された同じ著者の他の著作物も簡単に確認できます。

○ NDL-OPAC でリンクボタンが表示される画面 (いずれも日本語版のみ)

- ・一般資料(和図書、洋図書、和雑誌新聞、洋雑誌新聞、博士論文)の検索結果 書誌詳細表示画面
- ・雑誌記事索引の検索結果 詳細表示画面

○ Database Linker からリンクできるデータベース

当館が契約する電子ジャーナルデータベース、インターネットで無料公開されているオンラインジャーナル、機関リポジトリ、国立情報学研究所のWebcat Plus、GeNii、科学技術振興機構のJ-STAGE など

※ Database Linker に表示されるリンク先は、資料によって異なります。

※ リンク先のデータベースで本文等が表示されないときは、そのデータベースや Database Linker 内で、条件を入れ直して検索してみてください。

※ 有料の電子ジャーナルデータベースへのリンクは、当館が契約している場合に表示されます。館内(東京本館・関西館)または同じデータベースを契約している機関などの端末から利用できます。

※ 有料の電子ジャーナルデータベースの契約外の巻号に掲載されているものは、リンクが表示されても本文は見られません。



お知らせ

■ 資料収集の方針を ホームページに 掲載しました

8月6日に、国立国会図書館の資料収集の方針を示す文書として、「資料収集の指針」および「資料収集方針書（2009）」を当館ホームページに掲載しました。

「資料収集の指針」は、当館の資料収集の目的や基本的な方向性を示すものです（本誌571（2008年10月）号 16～17ページ参照）。一方、「資料収集方針書」は、資料収集の指針に基づき、当館において収集する資料の種類、範囲、優先順位等を示すものです。

「資料収集方針書（2009）」では、納本制度による国内出版物の収集のほか、国内出版物の複本や外国出版物の整備、電子ジャーナルやインターネット資料などの電子情報の収集について、それらの方針を記載しています。この資料収集方針書に基づき、社会、人文、科学技術などそれぞれの主題の担当者が中心となって収集する資料を選定しています。寄贈のお申し出があった場合にも、この方針書に基づき、受入れを判断しています。

資料収集の方針を公表するにあたり、当館ホームページに「蔵書構築」のページを新たに設けました。資料収集の手段や東京本館・関西館・国際子ども図書館の所蔵資料の概要についても紹介しています。

- URL <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/collection.html>
国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)
>国立国会図書館について>資料収集・保存>蔵書構築



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会

「本と子どもと大人をつなぐ場所— “本の城” (IJB) での 20 年」

国際子ども図書館は、ミュンヘン国際児童図書館 (Internationale Jugendbibliothek München : IJB) のガンツェンミュラー文子氏による講演会を行います。ミュンヘン国際児童図書館は、児童書を扱う図書館としては世界最大の規模です。東アジア部門担当者として長年にわたり児童書の収集・整理、類縁機関との交流や展示会企画などに携わってこられたガンツェンミュラー氏に、ミュンヘン国際児童図書館の活動とこれまでの経験についてお話しいただきます。

- 日 時 10月24日(土) 14:00～16:00
- 会 場 国際子ども図書館 3階ホール
- 演 題 「本と子どもと大人をつなぐ場所—“本の城”(IJB)での20年」
- 講 師 ガンツェンミュラー文子氏 (ミュンヘン国際児童図書館前東アジア部門担当、現日本部門嘱託)
- 対 象 中学生以上
- お申込方法 事前申込制 (応募多数の場合は抽選) です。次のいずれかの方法でお申し込みください。

[来館申込み] 国際子ども図書館 3階ホールカウンター

[往復はがき] 〒110-0007 台東区上野公園 12-49

国際子ども図書館「10月24日講演会申込み」係

[電子メール] ijb1024@kodomo.go.jp

タイトル・件名欄に「10月24日講演会申込み」

とお書きください。

※往復はがきまたは電子メールの場合は、参加者1名につき1通に、氏名(ふりがな)、年齢、住所、電話番号をご記入ください。

○お問い合わせ先

国立国会図書館国際子ども図書館 企画協力課

電話 03 (3827) 2053 (代表)

お知らせ

■ 関西館小展示第3回

「眺めてみよう、色々な国・ 時代の百科事典」



この秋、関西館では、百科事典をテーマとした小展示を行います。

百科事典は、物事について基礎的な知識を得るための資料として、時代の英知を集め、労力をかけて編さんされるものです。関西館では、幅広い調査研究を支援するため、国内外の百科事典を所蔵しています。

今回の展示では、18世紀に出版された *Encyclopaedia Britannica*（ブリタニカ百科事典）の初版（複製）、中国明代の図解百科事典『三才圖會』（複製）、江戸時代の『和漢三才図会』（複製）などの歴史的な百科事典のほか、近年韓国で刊行された『韓国三才図会』など、アジア地域の百科事典を展示します。また、明治時代の『古事類苑』の一部（東京本館所蔵）、18世紀末から19世紀にかけてドイツで出版された世界初の子どものための百科事典 *Bilderbuch für Kinder*（子どものための絵本）の一部や、1658年刊の *Orbis sensualium pictus*（世界図絵・複製）（以上2点は国際子ども図書館所蔵）をご紹介します。

入場は無料で、関西館所蔵の資料は実際に手にとってご覧いただけます。図版が豊富で、見た目に楽しい資料も展示します。この機会に、さまざまな百科事典を開いてみませんか？

- 開催期間 10月22日（木）～11月17日（火）
（11月15日を除く日曜・祝日は休館）
- 開催時間 10：00～18：00
- 場 所 関西館 総合閲覧室
- 入 場 無料



古事類苑
歳時部八
神宮司庁古事類苑
出版事務所編
神宮司庁刊
1908年
pp.1424-1425
歳暮

お知らせ

■ 「本の万華鏡」 第2回

「洋靴」



「東京風俗志 上,中,下巻」
平出鏗二郎著 富山房 1899-1902
<請求記号 382.136-H479t >
中巻 137頁 挿絵

今年2009年は、函館、横浜、長崎の開港から150年にあたります。鎖国が終わり、開国という時代の転機の真ただ中にあった日本には、西洋からの様々な文物が押し寄せてきます。日本人は、それらを様々な形で取り入れていきました。

その一つの例が「洋靴」です。珍しい西洋の品物として紹介されることから始まり、軍隊や官公庁などで取り入れられることで、喜んで、あるいは嫌々ながら、人々は靴を履き始め、さらに、ファッションとしても受け入れていきました。

今回の展示では、「洋靴」をテーマに、日本人がどのようにそれと出会い、受け入れていったかに焦点をあてて資料をご紹介します。普段足元を意識する方もしない方も、その歴史について思いをはせてみるのはいかがでしょうか。どうぞお楽しみください。

※「本の万華鏡」は当館ホームページ「リサーチ・ナビ」上で提供するミニ電子展示です。

○ URL <http://navi.ndl.go.jp/kaleido/>

■ 新刊案内

国立国会図書館

編集・刊行物



レファレンス 703号 A4 125頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・現代ドイツ教育の課題
- ・メンタル・ヘルスをめぐる米軍の現状と課題
- ・我が国の地方法人課税をめぐる租税競争
- ・国民健康保険の現状と課題
- ・大韓民国の議会制度 (資料)

入手のお問い合わせ

(社)日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川 1-11-14 電話 03 (3523) 0812

CONTENTS

- 02 Book of the month – from NDL collections
Yapon mohbiri
-the sole magazine introducing Japan to Muslim countries of the world
- 04 Talks with the Librarian of NDL (10)
Dr. Yuichiro Anzai, Executive Advisor for Academic Affairs and Professor, Keio University
Knowledge is power
- 12 All Aboard! for a Trip around Books on Vehicles
- 18 Public libraries' expectations of NDL
- 22 Stacks of the NDL (4) Improving the environment of the stacks (2)
- 27 Visual NDL Museum (14) Teletypewriter-style *kanji*(chinese characters) input device
- 28 Cooperation among German government libraries
- 11 <Tidbits of information on NDL>
○ *Annual Report of the NDL* - a book filled with one year of NDL
- 24 <Books not commercially available>
○ *Tama Dobutsu Koen 50 nenshi / shiryohen*
○ *Edo no hanayashiki: Hyakkaengaku nyumon: Mukojima Hyakkaen sosetsu 200 shunen kinen*
○ *Shokusanjin Ota Nanpo: oedo maruchi bunkajin koyuroku*
- 30 <Announcements>
○ Enhancement of PORTA
CiNii and JAIRO newly added to search targets
Mobile phone website launched on a trial basis
- More than 150,000 volumes available on the Digital Library from the Meiji Era
○ New service to link from search results of NDL-OPAC to other databases
○ Policy for Acquisition of Materials now available on the NDL website
○ Lecture at the International Library of Children's Literature:
A place to link books, children and adults - twenty years in "Book Castle," the International Youth Library, Germany
○ Small exhibition in the Kansai-kan (3)
Looking over encyclopedias of various countries and eras
○ Kaleidoscope of Books (2) Western Shoes
○ Book notice - publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 21 年 9 月号 (No.582)

平成 21 年 9 月 20 日発行 定価 525 円
(本体 500 円)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 網野光明
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社エポ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜き抜して転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)、「刊行物」-「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



「〔草花蝶とんぼの図〕」から
長谷川貞信画 本屋清七
1枚 37×17cm <請求記号 寄別 7-4-1-3 >

国立国会図書館月報

平成21年9月20日発行 (毎月1回20日発行)
(9月号通巻582号)

発売：社団法人 日本図書館協会 定価525円(本体500円)